

## マルコによる福音書2章 「罪ある人に仕えられる主」

### 1A 罪を赦す権威 1-12

#### 1B 病より大切なこと 1-5

#### 2B 権威の確証 6-12

### 2A 罪人との食事 13-17

### 3A 新しい訪れ 18-22

### 4A 人のための安息日 23-28

## 本文

マルコによる福音書2章を開きましょう、私たちは前回、イエス様がガリラヤにおいて宣教の働きを始められたところを読みました。イエスは、悪霊を追い出し、病を治される働きを行われ、それによってご自身に神からの権威を示されました。マルコによる福音書は、働かれるイエス、人々の下に自らを置き、人々の必要に仕えられる方としてのイエスを強調しています。教えられている内容よりも、その行われていることに焦点を当てています。

カペナウムで働きをしていたところから、福音を伝えるための他の町や村にも行かれました。イエス様にとって、病を癒すこと、悪霊を追い出すことは、福音を語ることの徴でありました。神のことばが確かであることを示し、その言葉に権威があることを示すためのものでした。ですから、それだけを求めて来るのであれば、福音を語る使命に集中して、他の町や村に出かけたのです。

それから、らい病人を清められました。それは、律法にとって大いなる意味がありました。らい病人が清められた時の掟はあったのに、肝心の清められることについては書いていないからです。その清めがなされるということは、神の介在があるからこそです。イエス様は、彼に祭司に見てもらって、証しをしないとされます。そして他には黙っていなさいと言われたのに、彼は言いふらしてしまいました。

そして、再びカペナウムに戻ってこられます。ここで、イエス様はご自分の働きを、律法学者やパリサイ人たちの前でも行われています。らい病人の清めのように、イエス様はご自身が神から来られた方であり、律法を成就させている方であることを証しようとしているのですが、彼らの心が頑なで受け入れず、イエスのしていることに批判をしている姿を見ることとなります。

### 1A 罪を赦す権威 1-12

#### 1B 病より大切なこと 1-5

1 数日たって、イエスが再びカペナウムに来られると、家におられることが知れ渡った。2 それで

多くの人が集まったため、戸口のところまで隙間もないほどになった。イエスは、この人たちにみことばを話しておられた。

イエス様の一行は、カペナウムに戻って来られたのですが、知られないようにして家の中に入られたのだと思います。けれども、知られて、多くの人たちが集まってきました。当時の家は、戸をきちんと閉じないでいました。人々がある程度、行きかうことができるようになっていました。昔の家みたいです。私の母の実家では、昭和二十年代からテレビを取り入れていたので、母は、自分の家に誰だか知らない人たちもテレビ鑑賞に来ていたと聞いています。そして素晴らしいことは、イエス様はこの人たちに「みことばを話しておられた」ということです。疲れておられたかもしれませんが、けれども、人々を生かす神のことばを語られていたのです。

3 すると、人々が一人の中風の人を、みもとに連れて来た。彼は四人の人に担がれていた。4 彼らは群衆のためにイエスに近づくことができなかつたので、イエスがおられるあたりの屋根をはがし、穴を開けて、中風の人が寝ている寝床をつり降ろした。5 イエスは彼らの信仰を見て、中風の人に「子よ、あなたの罪は赦された」と言われた。

午前礼拝の説教を思い出してください。イエス様にとっての福音が、病の癒しや悪霊追い出し以上に、罪の赦しであったということでもあります。そして事実、中風を患っていた本人は、罪が赦されたことを知って、深い安堵が訪れていたことでしょう。

イエス様は、中風の人信仰だけでなく、彼を担いでいた四人の人たちの信仰を見て、それで罪の赦しの宣言をしておられます。「彼らの信仰」とありますね、本人の信仰だけではないのです。屋根に穴まで開けるのですから、相当、常識外れです。愛というのは人をここまでさせる力を持っています。使徒パウロは、「ガラ 5:6 キリスト・イエスにあつて大事なものは、割礼を受ける受けないではなく、愛によって働く信仰なのです。」と言いました。

## 2B 権威の確証 6-12

6 ところが、律法学者が何人かそこに座つていて、心の中であれこれと考へた。7 「この人は、なぜこのようなことを言うのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」

律法学者たちがいました。ユダヤ教の指導者たちは、何か新しい働きがあれば、それが律法にかなつたものかどうかを調べに行かせるようなことをしていました。これは、律法にかなつたことで申命記 13 章には、不思議や奇跡を行っている者が、他の神々に仕えるように人々を唆したら、殺されなければいけないと書いてあります。ですから、ユダヤ教の指導層としては、人気を集めていたイエス様に対して、これが神から出たものであるのかどうかを調べるのは、道義にかなつたこと

でした。しかし、心を開いていないといけません。彼らは、「心の中であれこれと考え」て、否定的に考えています。それが彼らの過ちでした。イエスが、メシアであるはずがないとするのが初めからの前提であり、その否定的見解が、ついに殺意へと発展し、殺意がついに殺害に至ったのです。カインが、信仰によって羊を捧げた弟アベルのことで、妬み、落ち込み、それで殺してしまいました。人間が造られてから今に至るまで、このことは変わりません。肉によって生まれた者が、信仰によって、御霊にあって動いている者を迫害するのです。

午前礼拝で話しましたように、「神おひとりのほかに、だれが罪を赦すことができるだろうか。」というの、正しい見解なのです。人が人を赦すことはできますが、本質的には神に対して罪を犯しているのですから、神のみが人を赦すことによって、初めてその人の罪は赦されます。私たちがどんなに人に罪を隠しおさせたとしても、必ず、死んでから終わりの日に甦り、最後の審判で神に裁かれます。この神に対して申し開きをしなければなりません。けれども、間違えているのは、「神を冒瀆している。」ということです。

8 彼らが心のうちでこのようにあれこれと考えているのを、イエスはすぐにご自分の霊で見抜いて言われた。「なぜ、あなたがたは心の中でそんなことを考えているのか。9 中風の人に『あなたの罪は赦された』と言うのと、『起きて、寝床をたたんで歩け』と言うのと、どちらが易しいか。10 しかし、人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを、あなたがたが知るために——。」そう言って、中風の人に言われた。11 「あなたに言う。起きなさい。寝床を担いで、家に帰りなさい。」12 すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめた。

イエス様は、他の人々の心を見抜くことのできる方です。神を冒瀆していると考えていた彼らに対して、確かに罪を赦す権威が与えられていることを知らせるために、彼を寝床から起き上がらせます。ここでご自身の事を「人の子」と呼ばれていることに注目してください。ご自身は神の子であり、神ご自身です。けれども、「人の子」と呼び、ご自身を低められています。預言者イザヤ、エレミヤ、そしてエゼキエルも使っている言葉であり、預言者エゼキエルを主は「人の子」と呼ばれています。しかしながら、キリストが人の子として呼ばれている箇所があるのです。それがダニエル書7章です、「7:13 私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。」これは、イエス様が大祭司カヤパの前でご自身を証言した時にも引用された預言です。メシア、キリストであることを明確に表わす呼び名です。

そして、この奇跡を見た人々を非常に驚いています。「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言っています、神が介在されるとは、このように前例がないこと、今まで自分の経験や知識では決して把握できないことが起こる時に、はっきりと分かるものです。そして、「神をあがめた」と

あります。これは、人の業だとは思えない、それで神しかおられないということであがめているのです。私たちはしばしば、器をあがめます。この人がこれがすばらしい、あれがすばらしいと称えるのですが、そういったことを言っている間は、本当の意味で神に出会っているのか？と疑わないといけません。神に出会うということは、人を超えています。用いられている器を超えています。

## **2A 罪人との食事 13-17**

13 イエスはまた湖のほとりへ出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。14 イエスは道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

イエス様は再び出て行かれました。人々がいっぱいになったところでは、逆に人々に仕えることができなかったのも、そうされたのでしょう。カペナウムは、湖のほとりにあった町なので、そのまま町を出れば、湖のほとりです。弟子たちを召し出された時もほとりを歩いていましたので、「また」とマルコは書いていますね。そこに出て行かれると群衆がみもとにやってきていました。それでイエス様は歩きながら、みことばを教えておられます。

そして、「収税所」が見えてきました。カペナウムの町は、ヴィア・マリスというラテン語で呼ばれる、国際幹線道路が走っていました。「海沿いの道(イザ 9:1)」と、聖書には訳されています。エジプトから、地中海沿いを北上し、メジドの峠を越えて、イスラエル平野を通過し、そしてガリラヤ湖のマグダラのところに入り、そして湖のほとり沿いを走っていて、カペナウムのところでダマスカスに向かい北上します。ですから、そこはローマ軍が駐屯する所でもあったので、マタイやルカの福音書では、百人隊長の話が出てきます。また、通商路ですから、そこで輸入税と輸出税を徴収する収税官がいたのです。そこに、「アルパヨの子レビ」がいました。マタイのことです。

取税人は、したがってユダヤ人に嫌われていました。ローマ帝国の代理人として、徴税するからです。さらに、民から徴収する額は多く、ローマに納める額との差額で大きな利益を得ていました。したがってローマの犬になっていただけでなく、倫理的にも悪事を行っていたのです。ですから、ユダヤ教の指導者は、取税人とは交わるな、関わるなとまで言っていたのです。その彼が立ち上がったのです。イエス様が、どのような人に触れて行ったかをおさらいしてみましょう。漁師という、必ずしも教養があるとは言えない人々を弟子とされました。多くの悪霊につかれた人々、病の中にいる人々に触れられました。そして、汚れていると叫ばなければいけない、らい病人に触れています。また、おそらくは自分の罪によって中風に罹った人に、罪の赦しを宣言されます。福音というものが、弱き者、心貧しき者たちに対する良き知らせであることが、お分かりになるでしょう。

「彼は立ち上がってイエスに従った」とありますが、彼が弟子になって取税人をやめることは、他の漁師だったペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネよりも大きな決断であったに違いありません。彼ら

は仕事に戻ろうと思えば戻れました。ヨハネとヤコブは、父ゼベダイが漁業を営んでいましたから、なおさらのことです。けれども、マタイは再就職することはほぼ不可能だったでしょう。キリストに従う道は、もう振り返らない、戻らないという決断が必要です。

15 それからイエスは、レビの家で食卓に着かれた。取税人たちや罪人たちも大勢、イエスや弟子たちとともに食卓に着いていた。大勢の人々がいて、イエスに従っていたのである。16 パリサイ派の律法学者たちは、イエスが罪人や取税人たちと一緒に食事をしているのを見て、弟子たちに言った。「なぜ、あの人は取税人や罪人たちと一緒に食事をするのですか。」17 これを聞いて、イエスは彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人です。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」

取税人は、取税人たちの間でしか付き合いはありませんでした。ユダヤ教の中で、取税人が律法を守るように期待されてもいない人々であり、云わば、希望のない人々、見捨てられた人々だったのです。けれども彼らの間では付き合いがありました。レビすなわちマタイは、他の取税人たちを自分の家に連れてきました。そこにイエス様も弟子たちもいたのです。彼らの中にも、興味深くイエスについて来た人たちもいたでしょうし、またマタイに誘われてついて来た人たちもいたでしょう。そして取税人と並んで「罪人」たちもいます。これは遊女などがそれに該当しますが、ユダヤ教の中で同じように、もはやそれを守ることさえ期待されていない、除外されていた人々であります。だから、そういった人々が一つに集まって食事をしたのです。

そこに、「パリサイ派の律法学者たち」がイエス様や弟子たちが彼らと食事をしているのを見て、驚いています。律法学者は律法の専門家ですが、パリサイ派は、厳格にモーセの律法を守る熱心さによって、自分があらゆる汚れから離れることを強調していました。なので、取税人と罪人との食事という設定が、彼らにとっては考えられなかったことなのです。当時の食事は、私たちが共に食事をするよりも、もっと霊的な意味がありました。「一つになる」ということです。ラオディキアにある教会に対して、イエス様が、「あなたがたが悔い改めるなら、わたしは入って来て、共に食事をする」ということを言われていますが、それは親密な交わりをするという意味です。いわゆる「同じ釜の飯を食べる」という表現に近く、同じパンを裂いて食べます。同じ杯を飲み交わします。そして椅子に座るのではなく、低いテーブルでゆったりと肘をついて横になりながら食べる形式です。もっと親密で、距離が近いのです。

ですから、彼らには全く考えられない光景でした。詩篇 1 篇に、悪者と交わってはいけないという戒めが書かれています。「詩 1:1 幸いなことよ、悪しき者のはかりごとによらず、罪人の道に立たず嘲る者の座に着かない人。」ですから、彼らの考えていることはその通りなのかもしれません。けれども、これまで見たイエス様を思えば、むしろこれが御心にかなったことなのです。らい病人について、その汚れから離れなければいけないのですが、しかしイエスは逆に触れて、汚されるの

ではなく、彼のほうが清められました。ここでの交わりも同じです、悪者と食事をして悪に染まるのではなく、むしろ彼らの方が罪を悔い改めて、赦しを受けて、救われ、霊的に癒しを受けるのです。

イエス様は、医者と患者の喩えを使って、それでご自分の使命を語られました。正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来られたとのこと。福音というのが、このようなものなのです。一人一人が、霊的に病があるということ、いわくつきだということ、それを知っていて、それでイエス様に引き寄せられている者たちです。正しいと思っている人々のところに、イエス様は近づかれません。正しいと思っているだけで、実は心には深いところで虚しさや渴きがあるはずなのです。けれども近づかないのは、自分が正しいと思っている高ぶりを捨てられないからです。しかし、イエス様を知って、霊的に自分には病があると認めた時には、主がここにあるように一つになってくださる、親密な交わりを持ってくださるのです。

多くの人が、自分が清められてから、神に近づこうとします。自分がきちんとしてからでないと、神を信じることはできないと。その逆ですね、自分がそのまま神に近づいて、神が、イエス様が清めてくださるのです。

### **3A 新しい訪れ 18-22**

18 さて、ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちは、断食をしていた。そこで、人々はイエスのもとに来て言った。「ヨハネの弟子たちやパリサイ人の弟子たちは断食をしているのに、なぜあなたの弟子たちは断食をしないのですか。」

批判をしている人々に、パリサイ人たちだけでなく、「ヨハネの弟子たち」もいました。ヨハネの弟子たちと、パリサイ人たちは別の意味で断食を行っていましたが、パリサイ人たちは週に二度、行っていたことがルカ 18 章の祈りの中に出てきます。律法には、年に一度、贖罪日の時に身を戒めなさいと命じられているだけなのですが、その後、バビロンによって神殿が破壊された後に、そのことを記念して断食の儀式を加えていました。新約時代にはさらに、パリサイ人たちが週に二度の断食を慣行していたのです。バプテスマのヨハネの弟子は、おそらくヨハネが牢獄にいたので、そうした悲しみや嘆きを含んだ祈りを捧げるために、断食をしていたのでしょう。また、ヨハネ自身が悔い改めを強調し、メシアを待ち望んでいたのも、身を戒めるための断食は欠かせないものでした。けれども、イエスの弟子たちはそれを行っていませんでした。

ヨハネの弟子たちとパリサイ人たちを、それぞれ違った意味で、イエス様が正しておられると思えます。花婿と花嫁の譬えをこれからイエス様は話されますが、おそらくこれはヨハネの弟子たちをもっと意識して語っておられたかもしれませぬ。そしてパリサイ派の人たちには、新しい布切れと新しいぶどう酒の譬えにおいて、もっと彼らのことを意識しておられたかもしれませぬ。

けれども彼らに共通していたのは、自分たちが断食のような、いわば修行のようなものによって、自分を神に近づけようとしたことです。イエス様が、悪霊を追い出された後に、弟子たちに「この種のものは、断食と祈りによらなければ出て行かない」と言われたように、断食そのものは御心にかなったものなのです。けれども、とかく大きな過ちを犯してしまう領域でもあります。それを行うこと自体が自己目的化してしまい、それで霊的に神に近づいていると思い込んでしまうことです。預言者イザヤがこのことを預言していて、彼らが断食をしているのに、労働者を追い立て、争いと喧嘩をしていて、不正に拳で殴っているからだと言っています。そして、「58:6 わたしの好む断食とはこれではないか。悪の束縛を解き、くびきの縄目をほどき、虐げられた者たちを自由の身とし、すべてのくびきを砕くことではないか。」目的があってこそ断食です。それは、主の良き知らせを人々に知らせ、人々を救う神の働きに加わることです。イエス様はたった今、人を解放する働きに従事されています。神の御心を行うためにご自身を捧げておられるのであり、これこそが神の喜ばれる断食なのです。

19 イエスは彼らに言われた。「花婿に付き添う友人たちは、花婿と一緒にいる間、断食できるでしょうか。花婿と一緒にいる間は、断食できないのです。20 しかし、彼らから花婿が取り去られる日が来ます。その日には断食をします。

イエス様はご自身を花婿に例えておられます。そして花嫁がここでは弟子たちのことです。ユダヤ人の婚礼と祝宴は、盛大に行われ、喜びに満ちたものです。一週間かけて行ない、ぶどう酒をたくさん飲みます。あのカナでの婚礼がそれです。喜ばしい知らせが、イエス様が来られたということによって訪れたのであり、その時に喜ばずに、断食によって悲しみと嘆きを言い表すのは不適切だということです。実はヨハネ自身が、このことを話しています。イエス様のほうに多くの人々が集まって、バプテスマのヨハネのところから人々がイエス様のところに移っていた時に、弟子たちの中でそのことを不満に思っている声がありました。その時にヨハネはこう言いました。「ヨハ3:29-30 花嫁を迎えるのは花婿です。そばに立って花婿が語ることに耳を傾けている友人は、花婿の声を聞いて大いに喜びます。ですから、私もその喜びに満ちあふれています。あの方は盛んになり、私は衰えなければなりません。」ヨハネも自分を友になぞらえて、喜んでいたので、自分は衰えて、イエス様が盛んにならないといけないと言っています。

けれども、イエス様は、「彼らから花婿が取り去られる日が来ます。その日には断食をします。」と言われます。この時に、ご自身が死ななければいけないことを暗に示しておられるのです。イエス様の福音は、人々に喜びをもたらします。しかし、そこにはご自身の犠牲があり、最後にはご自分のいのちの対価によって、人々に罪の赦しを与えられます。

21 だれも、真新しい布切れで古い衣に継ぎを当てたりはしません。そんなことをすれば、継ぎ切れが衣を、新しいものが古いものを引き裂き、破れはもっとひどくなります。22 まただれも、新しい

ぶどう酒を古い皮袋に入れたりしません。そんなことをすれば、ぶどう酒は皮袋を裂き、ぶどう酒も皮袋もだめになります。新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるものです。」

イエス様は、二つの喩えを語りながら、一つの事を話しておられます。今の服のように防縮加工はしていないので、新しい布切れは必ず縮みます。それも見越して衣服を作るのですが、何度か洗濯した後に縮まなくなります。ですから、古い着物に新しい布切れで継ぎはぎをしたら、新しい布切れが縮んで、古い着物を破ってしまいます。同じ原則で、ぶどう酒の皮袋があります。新しい皮袋は柔らかいのですが、古くなると堅くなります。新しいぶどう酒は気化するのだから、古い皮袋に入れると、伸びないので破れてしまいます。

イエス様が行なわれていることは、新しい神の訪れでした。それは恵みの知らせであり、喜びの知らせです。罪ある人は神から離れなければいけない、ではなく、罪があると認めるからこそ、神が近づいて、罪を清め、霊を癒してください。ここには、思いや心の一新が必要です。新しい皮袋、新しい布によってでなければ、受け入れることができません。古いものを改良したところで、その器が古ければ新しいものは受け入れられないのです。改良や改善は、いつか躓きがきます。古い皮袋が裂けてしまう、古い着物がちぎれてしまうということが起こります。

私たちがイエス様を信じてから、もし前進せず、その場で留まっていたら、同じように古くなってしまいます。パウロは言いました、「Ⅱコリ 4:16 たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。」御霊によって変えられて、日々、新たにされて、それでイエス様を心に宿すことができます。自分自身が変わることを前提に、主から命じられたことを行うことを前提に動かなければ、必ず信仰的に躓きをもたらします。一人一人が自分自身の従来からのやり方の上に、イエス様の働きを接ぎ木することはできないのです。主の福音は、新しい御霊の働きであり、新しい御霊の働きについては、自分の従来からのものを捨てないといけません。

#### **4A 人のための安息日 23-28**

パリサイ派の人たちにとって、その古い皮袋は安息日でした。23節から読む出来事と、3章前半に出て来る安息日での出来事によって、彼らは、はたしてイエス様の働きを受け入れられず、どうやったらイエスを殺そうかと相談し始めたのです。

23 ある安息日に、イエスが麦畑を通っておられたときのことである。弟子たちは、道を進みながら穂を摘み始めた。24 すると、パリサイ人たちがイエスに言った。「ご覧なさい。なぜ彼らは、安息日にしてはならないことをするのですか。」

安息日は、神が六日で天地を造られ、七日目に休まれ、聖なるものとされたので、イスラエルの民に対して、七日目は休みなさいという命令です。働いてはならないという、厳しい戒めがありま



す。それでパリサイ派の人たちは、主が禁じておられる「労働」とは何であるかを、その枠組みを作るために言い伝え、口伝律法を作り始めました。律法の中にも料理のために火を焚いてはならない(出 35:3)、そのために木の枝を集めて来ること(民 15:32)、重い荷物を背負うこと(エレ 17:21)、そして、商売をすること(ネヘ 10:31 等)があります。けれども、その後、さらに詳しい、事細かい規定を設けました。そうした中で、「刈り取り」と「脱穀」は労働とみなされますが今、弟子たちが麦畑の中で穂を摘み始め、手ですり合わせて籾殻を取り払って、歩いて行く姿は、刈り取りと脱穀をしていると彼らはみなしたのです。

ところで、弟子たちのしていること自体は律法で禁じられていません。律法では、気前の良さを命令として教えている所があります。「申 23:25 隣人の麦畑の中に入ったとき、あなたは穂を手で摘んでもよい。しかし、隣人の麦畑で鎌を使ってはならない。」隣人の麦畑に鎌を入れたなら、それは盗みになります。けれども、空腹でその時に食べたいと願うものを食べるのは、それは必要を満たすためであり、神は寛容であることを教えておられます。ところで、私たちは教会で自分たちのごみを持ち帰るように勧めています、それを駅やコンビニのごみ箱に入れたとしたらどうでしょうか？駅やコンビニを利用して、どうしても捨てなければいけないものを捨てるために用意されているのであり、定期的に出て来るゴミを捨てるのは間違っていますね。それと似ています、必要に迫られて行なうことに神は寛容ですが、その寛容を利用して欲を出すことは禁じておられます。

ですから、ここでは弟子たちが穂を摘んでいたことは律法にかなったことであり、パリサイ派が問題視しているものではありません。その穂を摘むというのは、安息日にはしてはいけないという言い伝えがあったので、その言い伝えに違反していることを彼らは責めているのです。

私たちは、ある意味で絶えず、こういった罪の責めではなく、罪ではないことで責められることがあります。誰かに言われたわけではないけれども、自分に神の命令ではないものを課していることさえあります。これまで従来にやり方や考え方があって、それに従って神についてのことを当てはめようとする時に起こります。けれども、果たしてそれが神からの命令か？ということであれば、そうではないのです。従来にやり方や考え方があって、それから自由にされて構わないのです。けれども、律法にさらに人間の言い伝えを重ねてそれがあたかも神の命令であるかのように責めるように、神の命令以上のことをあたかも神の命令であるかのようにして自分に課して、重荷を負わせることがあります。そしてそれが守られないと、自分で責めるのです。これで、自分は駄目なクリスチャンだと思います。

25 イエスは言われた。「ダビデと供の者たちが食べ物なくて空腹になったとき、ダビデが何をしたか、読んだことがないのですか。26 大祭司エブヤタルのころ、どのようにして、ダビデが神の家に入り、祭司以外の人が食べてはならない臨在のパンを食べて、一緒にいた人たちにも与えたか、読んだことがないのですか。」

イエス様は、彼らも尊敬している王ダビデを例にして、彼らの律法解釈が間違っていることを指摘しておられます。ここに書かれているのは、サムエル記第一 21 章に書かれていることです(1-6 節)。ダビデは命を狙っているサウルの手から逃れる、逃亡生活を始めます。その時に、ノブという祭司の町に行き、当時、そこに幕屋が置かれていたのですが、そこに行ってパンを求めます。そして祭司は、その時、週ごとに置き換えたばかりの、臨在のパン(供えのパン)があります。それは主の前に供えられたものであり、祭司のみが食べることができるものです。例えば、聖餐式の時にものすごく腹を空かせた人がいて、三日間食べたことがないと言う人が来たとしましょう。それ以外にパンがなかったとします。その人はキリスト者ではありません。またキリスト者だったとしても、一切れの小さなパンでは空腹を満たすことはできないでしょう。ですから、そのパンを全てその人に与えたとします。こういったことはあまり考えにくいですが、けれども、主の命じられたことがあるけれども、目の前に基本的必要を持っている人々がいたらどうするのか？ということです。確かに律法では、祭司のみが食べることになっています(レビ記 24:5-9)。けれども、目に前に腹を空かせていたダビデがおり、それで祭司アヒメレクは彼にパンを渡したのです。つまり、人の基本的必要に対して憐れみを示すということを、神は教えておられるのだということです。

27 そして言われた。「安息日は人のために設けられたのです。人が安息日のために造られたのではありません。28 ですから、人の子は安息日にも主です。」

ここには、律法主義に対して端的な反論を、イエス様がしておられます。神はご自分のかたちに似せて、人を造られました。ご自身が六日で天地を造られ、七日目に休まれるように命じられましたが、それは人の益の為です。神のデザインの中に生きることこそが、人にとって益をもたらします。私たちは動いていると、もっと働かなければと焦り、奴隷状態になります。霊的にも、「もっと何かをしなければ神に喜ばれない。神から受け入れられない。」という焦りがあります。いいえ、その自分がしなければという衝動を押さえて、休むことによって、初めて神がすべてのことを行ってくださったのだと気づくことができるのです。休むことによって、初めから終わりまで、神がキリストにあって救いをご計画しておられるのだと知るので、だから、安息日は自分たちのためなのです。

ところが律法主義は、その主客を逆転させてしまいます。人のための安息日を、安息日を自己目的化することです。安息日のために人が造られたかのように逆転させるのです。自己目的化してしまうことが、一つの過ちです。

もう一つの過ちは、「人の子は安息日にも主です」というところです。人の子とは、イエス様ご自身がキリストであることを暗に示している呼び名ですが、わたしが主であって、安息日についてもわたしが主権を持っているのだということです。主に命じられているから安息日を守るのであり、あくまでも主の命令を守るしもべとして、彼らは生きているはずですが、ところが、まるで自分が教師であり、自分が主権を持っているかの如く動いてしまうことです。主を敬っているように見えながら、

実は自分のために主を利用していることになるのです。

以上ですが、私たちはここまで見て、福音というのが、いかに私たちに優しさと慰めを与えるものであるかを知ることができます。罪の赦しというのが、福音の根本です。それに付随して、人々からはのけものにされるような時にこそ、イエス様は食事をしてくださる、交わってくださいます。それだけでなく、基本的必要に対して主は敏感です。私たちはその恵みを受け入れる義務があります。自分で何かを成し遂げるような、これまでの自分にイエス様を付け加えるような、パフォーマンスは要らないのです。また、これまでの自分を変えるつもりがなく、イエス様の名だけを唱えていても同じことです。「Ⅱコリ 6:1 神の恵みを無駄に受けないようにしてください。」と、パウロはコリントの人たちに話しました。